

# 伝承文学としての『シンデレラ』－ 変種版の「表現形式」に見える世界

木村利夫

## はじめに

継母や継子（いじめ）をモチーフとする物語は世界中に見られるが、今日、『シンデレラ』として広く知られる作品はフランス・アカデミーの会員でもあった文人 Charles Perrault（1628 - 1703）がそれまで「伝承」の形で伝えられていた物語を他作品とまとめて出版したことに起源をもつ。その作品 *Histoires ou contes du temps passé, avec des moralités: contes de ma mère l'oye*（1697）（以下では『ペロ－童話集』とする）には、『眠れる森の美女』、『赤ずきんちゃん』、『長靴をはいた猫』などの有名な作品が含まれているが、その中でも『シンデレラ』はとりわけ世界中で読み継がれている伝承文学作品となっている。1729年にフランス語から英語に翻訳されてイギリスにもたらされると、伝承の輪がさらに広がり、作品としての確固たる地位が築かれることになった。<sup>(1)</sup> 当時の書物はイギリスにおいても非常に高価であったため、一般庶民がこの物語を読むようになったのは、イギリス各地で安価な価格で出版されていたチャップブックとして登場するようになってからのことである。現在の『シンデレラ』があるのも、小型の簡易本であるチャップブックが少なからぬ貢献をしていた事実の特筆されるべきである。チャップブックは印刷技術の発展、経済の発展、人々の嗜好と趣向の変化等に抗しながらも実に興味深い世界を見せてくれる「表現形式」として特異な存在である。小柄ながらも、やがては絵本へと、また大型本へと進化していく中での橋渡し役を十分に果たしたものであった。本稿では、多様な変化を見せるチャップブックの中で、時代とともに変化する社会文化を直接に受けて

変容した作品を中心に、そこから見える伝承文学としての『シンデレラ』を考察したい。

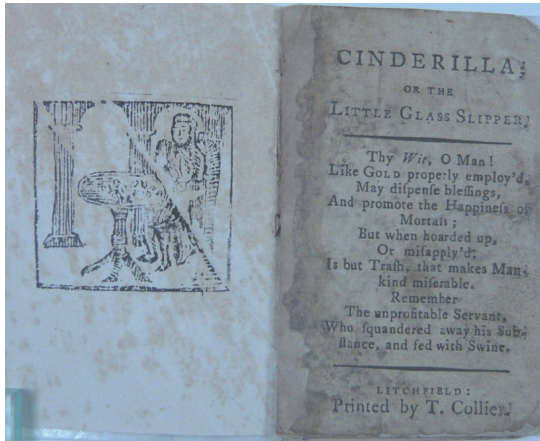
### 『シンデレラ』のチャップブックの登場

『シンデレラ』のチャップブックが登場するには『ペロー童話集』が英語に翻訳されてから少なからぬ歳月がかかったようである。チャップブックは出版事項、特に出版年の記載がないものが多い。筆者がこれまで調べてきた中でもっとも古いものは1760年頃から1790年頃になるものと推定されている。実は1764年には『ペロー童話集』のフランス語と英語の両方が一緒に印刷されている立派な書物が出版されている。<sup>(2)</sup>おそらくその前後から、『ペロー童話集』に収められていたアンソロジーとしての作品から独立する形でチャップブックとして出版されることになったと思われる。もっともこの18世紀中に出版された『シンデレラ』のチャップブックは非常に数が少ない<sup>(3)</sup>。現存する『シンデレラ』のチャップブックは1800年を越えてからのものがほとんどである。1820年前後がその絶頂で、1850年過ぎ頃には急速に姿を消すことになる。英国で出版された『シンデレラ』のチャップブックはCharles Perraultの物語を起源にするもので、『グリム童話』にみられるような「かかとを切り取ったり」、「つま先を切り取ったり」という逸話はない。個々のチャップブックを見ると実に様々な工夫や変更が施されているが、Charles Perraultの『ペロー童話集』から大きく逸脱したものはほとんどない。

### 『シンデレラ』の変種版のチャップブック

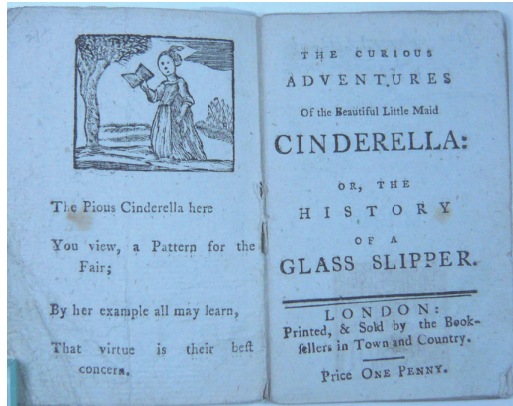
イギリス各地でチャップブックが出版される中、イギリスとは異なる第三の国、新大陸アメリカに『シンデレラ』の物語が伝わることとなる。フランスから直接輸入されたものではなく、イギリスで出版された作品を再利用、実際には模倣して作られた作品である。出版したのはT. Collierという出版者で、Connecticut州のLitchfieldで1800年頃に出版されていることから、チャップブックとしては早期にあたることにな

る。この出版者の T. は Thomas のイニシャルであるが、彼は 1784 年に Litchfield で出版業を始め、*Collier's Litchfield Weekly Monitor* や *Litchfield Monitor* などを出版し、地元で起きた出来事の記事を公にしていた人物である。<sup>(4)</sup> それだけに当時の世相に忠実であり、敏感であったと思われる。Litchfield のある Connecticut 州は、イギリスからアメリカへの入植が始まったもっとも古い「ニューイングランド」の地域で、1776 年に最初に独立した 13 州のうちのひとつである。その地で当時の文化社会的、特に宗教上の事情を色濃く反映したチャップブックが出来上がったわけである。模倣版であるが、異質な文化を持つ変種の作品と言えるものである。



(T. Collier によるチャップブックの口絵とタイトルページ (ca. 1800))

タイトルは *Cinderella; or the Little Glass Slipper*。このタイトルはイギリスで出版された同作のチャップブックによく見られる一般的な表記である。先に述べたように、この作品は先行する作品の焼き直しであるが、その作品のタイトルは *The Curious Adventures of the Beautiful Little Maid Cinderella: or, the History of a Glass Slipper* と汎用のものとは随分と異なるものであった。したがって、おそらくは他の作品を参考にして T.



(ロンドンで出版されたチャップブックの口絵とタイトルページ (ca. 1790))

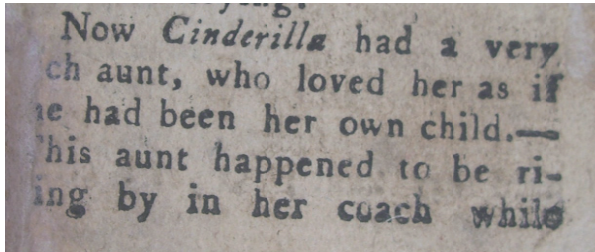
Collier が敢えて意図的に汎用のタイトルをつけたことになる。

T. Collier が模倣したチャップブックの出版事項は簡易で、出版地が London、価格が One Penny というのみである。これはチャップブックにはよく見られるパターンであり、価格の one penny から当時は penny history という名称がチャップブックに使われていた。チャップブックは one penny 程度で販売される簡易本のことで、history は「物語」を表す単語である。出版年は 1790 年頃と推定されている。

このチャップブックを下地にして、T. Collier はアメリカでの『シンデレラ』のチャップブックの製作に取り掛かる。著作権は無視して出版されたと思われるが、その許諾が必要であると思わせるほど、両作品は酷似している。挿絵を見れば一目瞭然であり、伝承文学がどのように伝承されて、広まったのか、そして同時にどのような変更が加わる可能性があるかをつぶさに垣間見ることができる好例である。

一般に、『ペロー童話集』や Samber の版でも『シンデレラ』で舞踏会に出席することができずに悲しむシンデレラのもとに登場する人物は、シンデレラの代母 (Godmother) であり妖精 (Fairy) である。1790

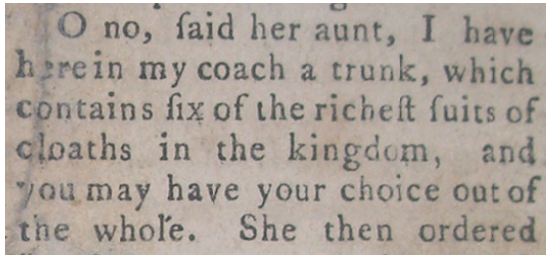
年頃のチャップブックはこの設定を変えてはいない。しかし、T. Collierのチャップブックは代母でもなければ妖精でもない。シンデレラを助けるのはシンデレラの「おば」(aunt)である。つまり、主にカトリック教会でみられる「代母」や超自然の存在となる「妖精」を示す記述は一切が変えられ、また削除されることになる。T. Collierの中に妖精物語を現実社会の物語として描こうとする意図が存在することがこの些細な一点からも伝わってくる。



(T. Collier, p.9.「おば」に関する記述)

さらに、その「おば」はシンデレラをわが子のように愛情を注ぐ裕福な人物と設定されている。裕福であることから、魔法で変えられる馬車、御者、歩兵、ドレスもすべてがその「おば」の所有物になる。したがって、庭までかぼちゃ、ネズミ、ハツカネズミ、とかげを探しに行くやりとりは省略されることになる。しかし、すべてを削除することは憚れたかのように、“sleek as mice”と比喩表現を用いて「ハツカネズミ」を登場させている。「おば」は自分の6頭立ての馬車をシンデレラに使わせる。ドレスは馬車にあるトランクの中に入れており、たくさんあるドレスからシンデレラにひとつを選ばせる。このチャップブックの作り手が意識的に魔法を避けていることに注目しなければならない。裕福な「おば」が親切に貸し与えるというどこにでもあるような現実の世界での出来事に変更されており、超自然現象を表すものは一切が排除されているのである。また、「おば」が所有する豪華なあまたのドレスの中からシンデレラ本人に選択をさせる描写に対し、アメリカの「自由主義」や「自

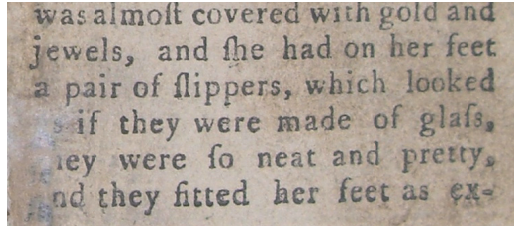
由経済」そして「資本主義」をそのまま読み込んでしまうのはいささか性急であろうが、少なくとも意志決定をシンデレラに委ねている点には興味がそそられる。『ペロー童話集』等では代母が魔法で変えたドレスをそのままシンデレラは躊躇せずに受け入れている。実際には、シンデレラはドレスへのこだわりがあり、翌日のためにシンデレラは姉たちにドレスを貸してくれるようにと断られるのを承知で頼むが、実際に断られると安堵するという態度も見せる。こうしたシンデレラの人間像を T. Collier は敬遠しなかったのかもしれない。<sup>(5)</sup>



(T. Collier, p.11. ドレスに関する記述)

こうした馬車一式とドレス以外に代母がシンデレラに用意するのが物語の核心をなす小道具、「ガラスの靴」である。やはり、T. Collier は「ガラスの靴」ではなく、単なる「靴」とする。彼はここでも「ガラスで作られているように見える」という比喩表現を加えているが、あくまでも「ガラスの靴」ではなく、現実的な描写を用いている。『ペロー童話集』では「ガラスの靴」は物語のキーワードであり、重要な役割を果たし、馬車一式やドレスとは一線を画した扱いである。というのは、約束の真夜中を過ぎて魔法がとけても、元の動植物の姿に戻らない仕掛け施されているのからである。『ペロー童話集』や 1790 年頃のチャップブックでは、代母は自分のポケットからガラスの靴を取り出して、シンデレラに手渡している。この「手渡す」行為には魔法が含まれないので、真夜中を越えても変化することなく、シンデレラを探す手がかりを与えることになる。この点で、『シンデレラ』は実に論理的に計算された物語と

言えるが、T. Collier ではこの魔法が関与しない「ガラスの靴」もわざわざ「ガラス」の文字を省いていることになる。超自然現象を意図的に回避する姿勢が見えてくる。



(T. Collier, (ca.1800) p. 11. (ガラスの) 靴に関する記述)

真夜中を過ぎる前に舞踏会の会場を去ることが代母から言い渡される約束である。最初の晩は言いつけ通りに早めに帰宅する。翌日もシンデレラは舞踏会上がりたいたいとおねだりをする。結局、二晩連続での舞踏会デビューとなるが、最終的には真夜中を過ぎてしまうことになる。この「真夜中」がぎりぎりの刻限となるわけであるが、T. Collier は“... her aunt charged her above all things, not to stay till after ten o'clock.”と門限の時刻を2時間も早くしている。T. Collier の単純な個人的な嗜好でしかないのかもしれないが、それを後押ししているのは1800年前後のアメリカ社会のもつ文化社会を反映したものであらうと思われる。実生活における行動規律に対しての厳格な姿勢をうかがわせるものである。時計の鐘が鳴る時刻についても Samber 版は“Cinderella heard the clock go eleven and three quarters: ...” (p. 83.) となっているのに対して、T. Collier は“she heard the clock strike nine and three quarters: ...” (p. 15.) となっており、ちょうど限界時間の15分前という点は同じであるが、門限の10時という数字が誤植ではなく、意識的に変更されていることがわかる。

次に、1790年頃にロンドンで出版されたチャップブックとT. Collierのチャップブックの挿絵を比較する。先述した通り、両者がいかに酷似しているかが瞬時に理解されることになる。



(ロンドン、(ca.1790) p.11. (左) T. Collier, (ca.1800) p.8. (右)  
舞踏会の支度をする姉たち)



(ロンドン、(ca.1790) p.16. (左) T. Collier, (ca.1800) p.12. (右)  
舞踏会に向かうシンデレラ)



(ロンドン、(ca.1790) p.19. (左) T. Collier, (ca.1800) p.14. (右)  
シンデレラと王子)





(ロンドン、(ca.1790) p.21. (左) T. Collier, (ca.1800) p.16. (右)  
姉たちを出迎えるシンデレラ)



(ロンドン、(ca.1790) p.25. (左) T. Collier, (ca.1800) p.18. (右)  
シンデレラを追いかける王子)



(ロンドン、(ca.1790) p.29. (左) T. Collier, (ca.1800) p.21. (右)  
ためし履きをするシンデレラ)

以上の挿絵を見れば、T.Collier が 1790 年頃のロンドンのチャップブックを利用して挿絵を作っているのは明らかである。先行の挿絵を反転させて、ほぼ同じ構図を使えば作製のための時間と費用が大幅に削減される。しかしながら、次の挿絵を利用したものは T. Collier には存在しない。



(ロンドン、(ca.1790) p.12. (左) 同作 p.14. (右))

左側にある挿絵は、2人の姉たちを見送った後、泣いて悲しんでいるシンデレラのもとにやってきた代母の登場の場面である。また右側は魔法を使う代母を描いたものである。このふたつを同時に削除していることから「魔法を扱う代母」を連想させるような「おば」の存在を挿絵の形でも示すことを避けていることが理解される。少なくともシンデレラの「おば」として登場させることは可能であろうが、「おば」の姿を挿絵に登場させなければ、読者の視点と興味を「おば」や「魔法」に向けさせてしまう可能性を封じることができるようになる。実は、この2枚の挿絵以外にも T. Collier が削除した挿絵がある。



(ロンドン、(ca.1790) p.17. (左上) p.27. (右上) p.24. (下段))

上段にある2枚の挿絵は一人で歩くシンデレラと、王子様の従者であろうと思われる人物の挿絵である。物語の流れにおいて重要な役割を果たしていない。挿絵の作製費や印刷費の削減に一役買ったものと思われる。しかし、下段のダンスの挿絵は舞踏会でのダンスの場面であり、読者を惹きつけるもので、多くのチャップブックの挿絵に登場するものである。さらに魔法や「おば」を連想させるものでもないことを考えると何らかの特別な事情があつて削除されたものと考えられることができる。場所は舞踏会であり、ダンスをするシンデレラと王子を描く挿絵は自然な流れであるが、T. Collierの眼には別に映つたのであろうか。この二人の姿勢をダンスではなく抱擁と解されることを嫌つたのかもしれない。特に読者に子どもが含まれるとの意識が加わると、その基準は存外に厳

しいものとなったのかもしれない。

これまで見たように、物語の現実的な解釈による登場人物の設定の変更、挿絵の意識的な取捨選択などから T. Collier がそうせざるを得なかった背景が見えてくる。それは当時のアメリカ東部の社会に漂う風潮、つまりイギリスからアメリカに入植して以来、依然として根強く浸透している文化社会的な側面、つまりピューリタニズムという概念があったことは確かなことであると思われる。禁欲的なプロテスタンティズムの流れを持ち、規律と勤勉と節約を三本柱とする倫理感が生まれ、そうしたスペクトラムで社会を見渡すようになった時期である。精神世界を意識しながらも現実の社会での成功に重きを置くようになり、実質的な資本主義の概念も生まれていた。これらは禁欲的なプロテスタンティズムを源流とするものであろうが、小さな本に過ぎないチャップブックに対しても厳格に実践を施したことになる。そしてこのことを裏付ける資料がこのチャップブックには含まれているのである。

### チャップブックに追加された讃美歌

実は、T. Collier のチャップブックには『シンデレラ』の作品には珍しく、キリスト教で歌われる讃美歌が物語の本編に引き続いて置かれている。これは作者が本作品に宗教性を色濃く表出しようとする明確な意思を示すものである。讃美歌が『シンデレラ』物語と一緒にされているチャップブックはこの他には見たことがない。非常に奇異な現象に思われる。そのページには *A Morning Song* というタイトルが置かれているだけで作者についての記載はない。当時はその詩行を見ただけで誰の作であるか判別できたのかもしれない。というのは、これはとても有名な讃美歌で、「イギリス讃美歌の父」と呼ばれる Isaac Watts (1674 – 1748) によるものだからである。<sup>(6)</sup> オリジナルは、1715 年にロンドンで出された *Divine Songs Attempted in Easy Language, for the Use of Children* に収められた曲である。<sup>(7)</sup> 彼は非国教徒の家庭に生まれ、讃美歌を多く創作した。その中で、この *A Morning Song* となる “When I Survey the Wondrous

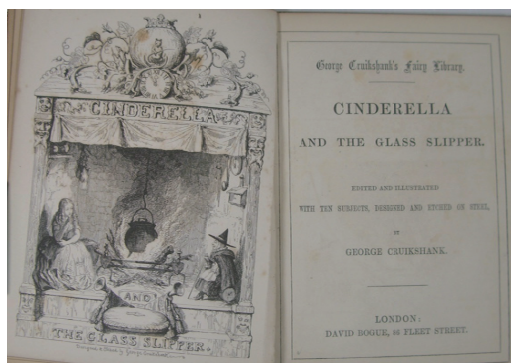
Cross”（『さかえの主イエス』）は人々に広く知られていたもので、イギリスの四大賛美歌のうちの一つとされているものである。これは現在の日本でも、日本福音連盟の聖歌 158 番、『十字架にかかりし』として歌われている。この讚美歌はイギリスの詩人で、批評家でもある Matthew Arnold (1822 - 1888) に「英語で書かれた最も美しい讚美歌」と讃えられてもいる。Isaac Watts の讚美歌は、当時のイギリスではプロテスタントの教会の間で広まったものであるが、彼の *Hymns and Spiritual Songs* (1707) は 18 世紀においてもっとも人気があり、もっとも影響力を持った書籍のうちの一冊として見なされてもいる。<sup>6)</sup> 新大陸アメリカに渡ったピューリタンもその流れを踏襲したことが、この T. Collier のチャップブックからも如実に理解されるものである。T. Collier はイギリス伝統の国教会とは一線を画した Isaac Watts に共感し、『シンデレラ』という伝承物語に敢えて、讚美歌を加え、独自独特の世界を作り出そうとしたのである。そこには誰に憚ることもなく、率直に、不要なものは捨て去り、必要とするものは大胆に入れ込んでいく信念とでも言うべき気概を感じざるをえない。彼はその気概を数枚の挿絵の中に凝縮させているのである。伝承文学もその時代背景にあって実に大きな変容を示すことが理解できるものである。

### George Cruikshank の『シンデレラ』 - もうひとつの変種版

前項では、時代のうねりを背景にした伝承文学の変容を見てきたが、ここではまた違った社会文化的な側面を持つ「表現形式」の『シンデレラ』を眺めようと思う。これはチャップブックではないが、「個人的な意向」によるバイアスのかかった作品に変容したものではあるが、やはり当時の時代の流れに影響され、それが著しく極端に反応してしまった作品と見なすことができるのではないかと考える。

扱う作品は George Cruikshank (1792 - 1872) の『シンデレラ』 *Cinderella* (1854) である。Cruikshank は 19 世紀を代表する風刺・挿絵画家であり、『グリム童話集』の英訳版 *German Popular Stories* や Charles Dickens

(1812 - 1870) の『ボズのスケッチ集』 *Sketches By Boz* (1836) や『オリバー・ツイスト』 *Oliver Twist* (1837) の挿絵を手掛けている。画家である彼が挿絵だけではなく本編をも手掛けた作品を残している。George Cruikshank's Fairy Library のシリーズとして『親指太郎とセリーグ靴』 *Hop O' My Thumb* (1853)、*Cinderella* (1854)、『ジャックと豆の木』 *Jack and the Bean Stalk* (1854)、『長靴をはいたねこ』 *Puss in Boots* (1864) が出されている。これらの妖精物語はチャップブックで加えられた変更とはまったく異なる変更が見られる書物となっている。



(George Cruikshank, *Cinderella*. (1854) の口絵とタイトルページ)



(George Cruikshank, *Cinderella*. (1854) p.12. と p.13 の間にある挿絵)

この2枚の挿絵は「代母」を描いたものである。Cruikshankは妖精である代母をわざわざ魔法使いらしく描写している。1790年頃のチャップブックやT. Collierの1800年頃のチャップブックと比べると、Cruikshankの描写は写実的になっている。小口木版による挿絵とエッチングによる挿絵のタッチの違いもあるが、明らかに代母に対する視点が変わっている。本編の物語の筋は、2つのチャップブックと同様で、Charles Perraultに基づいているが、Cruikshankの場合、代母は小びと(dwarf)という表現を使っている。これはRobert Samber版などの「妖精」(fairy)ではないが、それに近い存在であることを示すものであろう。ガラスの靴に関して、ポケットから取り出す点ではRobert Samber版と同様であるが、靴の底や内側は弾性のある素材で出来ており、繊細に紡がれたガラスで外側が覆われているという現実的な解釈に変えている。彼が加える変更は綴られる文字と文字の間にある世界を埋めて行く作業であり、そして伝承文学としての妖精物語を可能な限り現実の世界に置き換えようとする姿勢にあると言える。これは物語に本来含まれている「なぜ」という疑問に答える形で示されることになる。たとえば、物語の前半部分では、次のような展開となる。シンデレラの母親が亡くなってしまうのは、「もともと身体が弱く、町中の医師に診てもらったが助からなかった」からであり、継母がシンデレラに意地悪になった理由は、「継母は社交好きなところがあり、賭け事をして、お金をだまし取られた結果、使用人を解雇しなければならなかった」からである。こうした現実的な解釈を加える点は、先に見たT. Collierの作品と共通する部分が見られる。しかしCruikshankは手を緩めることはしない。シンデレラの父親は莫大な借金のために投獄されることとなる。しかし、この程度の変更はCruikshankにとっては序の口とも言えるもので、後半ではさらに大胆な変更が加えられる。当時の時代の様相を一面では反映したものとも言えるが、その変更ぶりはいささか常軌を逸しているところがあった。Cruikshankは当時盛んになっていた禁酒運動(temperance)にのめり込んでいき、絶対禁酒主義者(total abstainer)となり、彼が描

く童話物語にまで直接的に影響を及ぼすこととなった。彼は本作品の以前に *The Bottle* (『酒びん』(1847)) や *The Drunkard's Children* (『飲食者の子供たち』(1848)) と飲酒による弊害を扱った連作画を発表していた。童話物語に強い道徳的な主張を加えるという行為に対して Dickens は 'Frauds on the Fairies' 「妖精へのまやかし」と題したエッセーを出して Cruikshank を非難したのは周知の通りである。<sup>9)</sup> Cruikshank は子供が読む物語に個人的な信条をストレートに引き込んでしまったわけである。われわれの様々な刺激を経験した現代の眼から見ると、たとえどれほど大きな改作であっても「パロディ」と見なし一服の清涼剤ととらえることも可能であるかもしれないが、Dickens は果たしてまったくの容赦をせず、看過することはなかった。伝承文学に対する冒瀆であると断罪したのである。Cruikshank の描く物語の後半は次のようなものである。シンデレラが王子の探していた女性であることがわかった後、シンデレラは代母とともに宮殿に向く。王様はシンデレラの父親が旧知の友人であることが分かり、釈放の準備を整える。王子とシンデレラの結婚を祝して王様はこれまでにない壮大な計画を提案する。そのなかには「ワインの泉」'fountains of wine' を宮廷の中庭や市中に設置して盛大にお祝いをする計画を立てる。これに対して代母は敏感に、そして断固としての態度で反対の意見を述べる。「皇室の儀式には付き物であり、人々は「ワインの泉」がなければ落胆するであろうと王様は反論するが、代母は、飲酒の弊害を並び立て、死者が出ることもあり、病気や惨事や犯罪がともなわれる」などと説得を続ける。その結果、王様は代母の意見に納得し、「ワインの泉」は取りやめることになる。そして、それどころかワインやビールなどのアルコールが集められ、結婚式の夜に焼き払われることになってしまう。さすがにこうした結論に至っては『シンデレラ』の物語から完全に逸脱したものとなってしまっている。Cruikshank の暴走とも言える物語の展開は確かに個人的な信条によるところが大きいであろうが、オーソドックスな物語の行間に潜むドラマを埋める行為から生まれたものであろうと思われるが、その想像は思わぬ大きな落とし穴が存



在することを示していると思われる。

### 文字と文字の隙間

#### － 伝承文学と実社会を埋める試みとしての「表現形式」

次に、George Cruikshank の作品でも見られた「表現形式」であるが、物語の行間を埋める作業を文字だけではなく挿絵を通して表現している一例を『シンデレラ』の別の作品から眺めようと思う。



(John Harris, *Cinderella*. (1825) p.11.)

この挿絵は、George Cruikshank よりも半世紀ほど時代がさかのぼるが、「イギリス児童文学の父」と称される John Newbery の後継者 John Harris (1756 – 1846) が手がけた『シンデレラ』にある一枚である。挿絵の下部に韻文の本文が置かれている形式であるが、絵本の原点とも言えるものである。物語には実際に文字として語られる以外に行間に埋められたドラマが存在する。出版者たちは想像をめぐらせ、そのドラマやそれを象徴する場面を想像する。この挿絵はまさにその想像の結実の一枚である。舞踏会から突然逃げ出してしまった女性を想い、拾った片方のガラスの靴を手にながらカウチに横になって眺めている王子と彼を心配して見つめる王妃が描かれている。本文には、王子が病気になったと王妃

が思い、医師に診てもらおうという内容である。読者は有名な伝承文学ということで、オーソドックスな物語の大筋はすでに記憶の中にあると考えられる。こうした行間に潜むドラマを挿絵に描かれることにより、読者はおそらく大いに共感することになったのではないだろうか。これなどは伝承文学が有する強みを上手に利用した「表現形式」に他ならない。

### おわりに

1790年頃のロンドンで出版されたチャップブックを契機にして大きくジャンプした1800年頃のT. Collierによるチャップブックの世界、George Cruikshankが繊細な神経を払いながらも、というよりも神経を払ったが故に大きく逸脱してしまった世界、そしてJohn Harrisの主流にありながらも流れの間隙を縫うような挿絵の世界、これらは出版された時代も違い、作品の形態もまったく異なっているにもかかわらずそれぞれが何らかの意図を持って革新的な作品に仕上げたという点で異彩を放っているという共通点を持っている。同じ伝承文学である『シンデレラ』を扱いながら大胆な変容を見せることになるが、その底辺にあるのは伝承という伝統の上に立ちながらも、その伝統に抗する想像と創造の相克の表れであると思われる。宗教を背景とした信念の強さがあり、個人の禁酒主義への信念の強さがあり、そして子供の読者を意識して楽しさを追求しようとする心の強さを感じさせるものである。変容の自由度の高いこうした作品が登場しながらも、伝承文学は揺るぎなく今日まで伝えられているという事実が存在する。これこそ伝承文学が有する最大の武器であり、今後もわれわれの想像を超える作品が現れても、動じることなく輝き続けるのではないかと思われる。それは伝承と言う時間を超越する歴史の重さなの故であろう。

### 注

- (1) 1729年のRobert Samberが英語に翻訳した書籍はM. Perrault, *Histories or Tales of Past Times: With Morals* (London: 1729)である。

- (2) 1764年のフランス語と英語が併用されている書籍は M. Perrault, *Contes du tems passé de ma mere l'oye. Avec des morales* Sixieme Edition (Londres: 1764) である。(この書籍のタイトルの一部 tems の文字は本来であれば temps が正しい綴りであるが、誤植が見られる版となっている。)
- (3) John Ashton, *Chap-Books of the Eighteenth Century* (London: Chatto and Windus, 1882).  
 Charles Hindley, *The History of the Catnach Press: at Berwick-upon-Tweed, Alnwick and Newcastle-upon-Tyne, in Northumberland, and Seven Dials* (London: Charles Hindley, 1887).  
 John Feather, *A History of British Publishing* (London: Routledge, 1988) , pp.162-163.
- (4) Samuel H. Fisher, *The Publications of Thomas Collier: Printer 1784-1808* (Litchfield: The Litchfield Historical Society, 1933), pp. ix-xiii.
- (5) シンデレラが舞踏会に出かける回数は『ペロ－童話集』では二晩連続の2回である。しかし、Walt Disney (1901-1966) が作製したアニメーション映画『シンデレラ』(1950)では1回のみとなっている。この映画やその絵本によってこの物語が一気に世界中に広まることになったことは言うまでもない。この映画は『ペロ－童話集』に基づいてはいるが、それ以外にも大きく脚色されている箇所が多い。また、か弱いシンデレラではなく違ったシンデレラ像が見られるのも「舞踏会」にまつわる場面である。舞踏会を前に、親切な代母に対して普段着の醜い服装のままでは行きたくないときっぱりと自己主張するシンデレラがいるし、初日の舞踏会から帰宅した姉たちを出迎える際にシンデレラが見せる優越感とも捉えられる描写があり、また、断られるのを承知で姉にドレスを貸してほしいと話しかけ、断られて安堵するシンデレラの姿などは注目すべき点である。
- (6) Isaac Watts が手がけたものには“Joy to the World” (『もろびとこぞりて』) があるが、これは言うまでもなく世界中に知られた讃美歌である。旧約聖書詩篇98編「賛歌」をもとに書かれた詩で、今では賛美歌112番として置かれ、クリスマスの時期に歌われことが多い。また、児童文学の関連で有名なものとしては、数学家でもある小説家の Lewis Carroll (1832-98) が挙げられる。その著 *Alice's Adventures in Wonderland* の第2章に出てくる歌に“*How Doth the Little Crocodile*”があるが、これは Isaac Watts の歌“*Against Idleness and Mischief*”の歌詞の一部を変えて、パロディ化したものである。
- (7) *Musica Britannica Vol. LXXXV: Eighteenth-Century Psalmody*, eds. Nicholas Temperley and Sally Drage (London: Stainer & Bell, 2007), p. 322.
- (8) *The Cambridge Companion to Puritanism*, eds. John Coffey and Paul C. H. Lim (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), p. 334.
- (9) *George Cruikshank: A Revaluation*, ed. Robert L. Patten (Princeton: Princetor

University Press, 1992), pp.236-247. *Children's Literature: An Illustrated History*, ed. Peter Hunt (Oxford: Oxford University Press, 1995), pp.137-138.

後者の著書の 'The Emergence of Form: 1850-1890' を執筆した Julia Briggs and Dennis Butts は Dickens と Cruikshank の論争について以下の様に、短的に指摘をしているが、事の本質を捉えた良識の見解であると考ええる。

While Cruikshank's 'improvements' were absurd, his anxiety about the cruelty, violence, and amorality of fairy-tales was more justified than Dickens would admit: the counter-claim that these were 'harmless little books', inculcating gentleness and mercy, is, in its way, equally reductive. (p. 138.)

### 参考文献

- 今関恒夫 『ピューリタニズムと近代市民社会』(みすず書房 1989)  
大木英夫 『ピューリタン— 近代化の精神構造』(中公新書 1968)  
亀井俊介 『ピューリタンの末裔たち — アメリカ文化と性』(研究社出版 1987)  
佐伯啓思 『アメリカの終焉』増補版 (TBS プリタニカ 1998)  
陣崎克博 編 『アメリカ — その特質と諸相』(英潮社新社 1957)  
J. C. ブラウアー 『アメリカ建国の精神 - 宗教と文化風土』野村文子(訳)(玉川大学出版部 2002年)  
増井志津代 『植民地時代アメリカの宗教思想 — ビューリタニズムと大西洋世界』(上智大学出版 2006)

Adams, B. P. (1953). *About Books and Children: Historical Survey of Children's Literature*. New York: Henry Holt and Company.

Darton, F. J. H. (1999). *Children's Books in England: Five Centuries of Social Life*. Third Edition Revised by Brian Alderson. London: The British Library & Oak Knoll Press, 1982.

Darton, L. (2004). *The Dartons: An Annotated Check-list of Children's Books Issued by Two Publishing Houses 1787-1876*. London: The British Library and Oak Knoll Press.

Dundes, A. ed. (1988). *Cinderella: A Casebook*. Madison, Wisconsin: rpt. The University of Wisconsin Press, 1982.

Feather, J. (1988). *A History of British Publishing*. New York: Routledge.

Gould, P. (1996). *Covenant and Republic: Historical Romance and the Politics of Puritanism*. Cambridge: Cambridge University Press.

Grenby, M. O. (2011). *The Child Reader, 1700-1840*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Griffin, S. M. (2004). *Anti-Catholicism and Nineteenth-Century Fiction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hill, C. (1986). *Society and Puritanism in Pre-Revolutionary England*. Bungay: Peregrine Books.
- Madsen, D. L. (1996). *Allegory in America: From Puritanism to Postmodernism*. Houndmills: Macmillan Press.
- Maxwell, R. (2002). *The Victorian Illustrated Book*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Patten, R. L. (1966). *George Cruikshank's Life, Times, and Art*. Volume 1 & 2 New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press.
- Rulan, R. and Bradbury, M. (1991). *From Puritanism to Postmodernism; A History of American Literature*. New York: Routledge.
- Sasek, L. A. (1961). *The Literary Temper of the English Puritans*. New York: Greenwood Press, Publishers.
- Volger, R. A. (1979). *Graphic Works of George Cruikshank*. New York: Dover Publications. *The Publications of Thomas Collier 1784–1808*. (1993). Litchfield: The Litchfield Historical Society.

尚、本稿は、2014年度のフェリス女学院大学と鶴見大学の共同研究協定（研究題目「宗教・芸術の表現形式及び伝承に関する研究」）に基づく結果及び成果として発表するものである。特にフェリス女学院大学 文学部 英文学科教授、藤本朝巳先生には大変にお世話になった。改めて感謝を申し上げる。